

学 会 名

第60回日本リハビリテーション医学会学術集会
(令和5年6月29日～7月2日)

研究テーマ

COVID-19クラスター禍の回復期病棟における理学療法士の役割

病 院 名

健育会 ねりま健育会病院

演 者

○岸下亜希子(理学療法士)
遠藤春菜(理学療法士)、奥川裕介(理学療法士)、松本夢奈(理学療法士)、二瓶太志(作業療法士)、グラハム亮子(言語聴覚士)、酒向正春(医師)

概 要

【目的】3度のCOVID19クラスターを経験した回復期病棟における理学療法士（PT）の役割について考察した。

【対象・方法】対象は当院回復期病棟入院患者で、クラスター時にPT介入のあった患者（第1期63名、第2期80名、第3期76名）である。各クラスター時のPTの業務内容と単位数、感染者数、そして、各クラスター前後の患者の運動FIMの変化について後方視的に調査した。

【結果】PT業務内容は、第1期は感染制御を優先し、主にケアスタッフとして患者の見守りや早遅番帯を含むADL支援、環境清拭、感染ゴミ処理、LINE面会に従事した。このケア業務に加えて、第2期は陰性患者に単位介入し、第3期は陽性患者にも単位介入を行い、自主訓練指導や自室内廃用予防訓練を実施した。PT単位数は、第1期 0.2 ± 0.8 単位/日、第2期は 2.0 ± 2.0 単位/日、第3期は 2.9 ± 1.6 単位/日であり、通常の 4.8 ± 1.8 単位/日より低下した。PT感染者は第1期5名（うち院内感染4名）、第2期6名（4名）、第3期6名（3名）であり、院内感染の割合が高かった。運動FIMは、第1期では低下したが、第2期と第3期では有意に向上した。

【考察・結語】PTが他職種と連携し自主練習や離床機会を確保する取り組みが有効であり、クラスター期間中も感染対策を実施しつつPT単位介入が可能であった。一方、PTがクラスターの起点となった可能性も考えられ、長下肢装具練習などの密接度の高い練習場面は確実な感染予防対策が必須であると思われた。